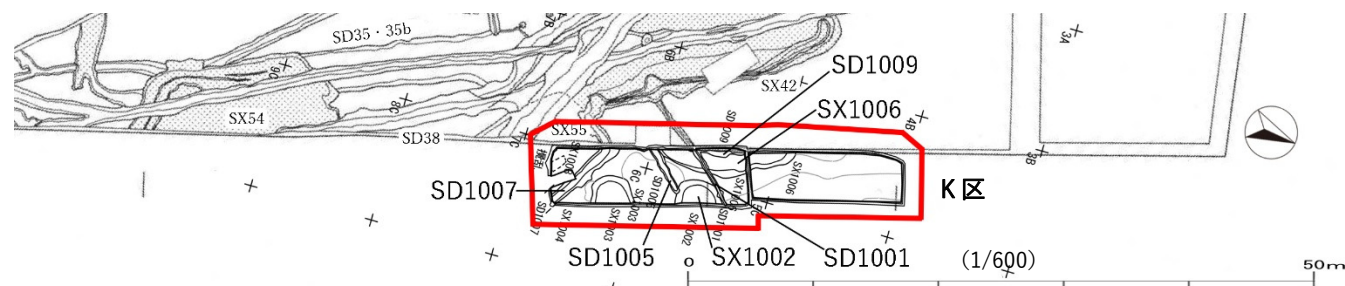


K・L 区の調査概要

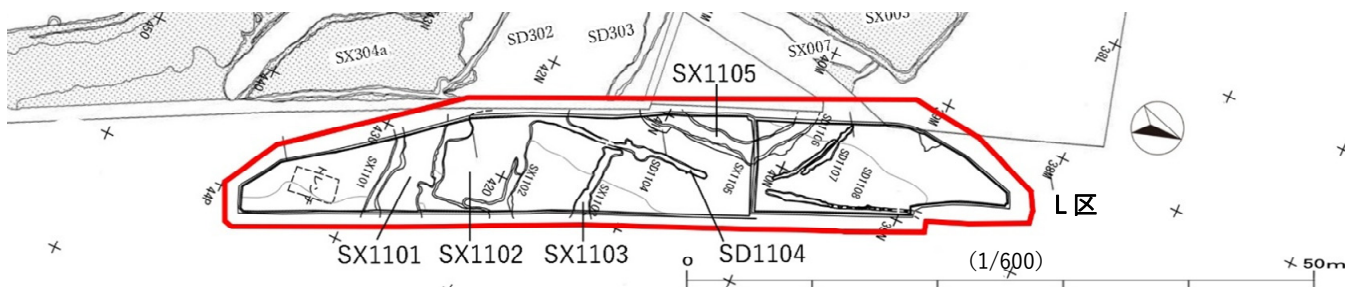
K 区では凹地遺構^{くぼち いこう} 4 基、溝 4 条、性格不明遺構 1 基を検出しました。凹地遺構の平面形は溝状（SX1006）のものがありますが、他の 3 基は大部分が調査区外に延びるため不明です。溝は凹地遺構より新しいものが多い（SD1001・1009 が SX1006 より新しく、SD1005 は SX1002 より新しい）、凹地遺構が古いことがわかります。溝（SD1001・1007）は隣接する平成 3・4 年度の調査で検出した溝の続きになります。

L 区では凹地遺構 4 基、溝 4 条を検出しました。凹地遺構の平面形は不整形（SX1101・1102）と溝状（SX1103・1105）に分けられます。不整形のものは外周の一部に周溝状の落ち込みが見られ、水の取得を必要としたためと考えられます。溝（SD1104）は凹地遺構（SX1102）に連結し、埋土も類似しており、新旧関係は認められませんでした。他の溝も凹地遺構の主軸方向に平行もしくは直交しています。L 区では凹地遺構と溝は同時期に機能し、溝は凹地遺構に導水・排水するための施設と考えられます。

K・L 区の遺構の時期は、L 区の遺構が奈良～平安時代の遺物包含層であるⅢ層上面から掘り込まれていることと、平成 3・4 年度の調査区から鎌倉～室町時代の遺物が出土していることから、この時期のものと推定されます。凹地遺構は形状から水の取得を必要としていたこと、それに導水・排水する溝の存在から水田として機能していた可能性があります。



■K 区と平成 3・4 年度調査区の遺構全体図



■L 区と平成 3・4 年度調査区の遺構全体図



■写真⑦ K 区南側の完掘状況（北から）



■写真⑧ L 区南側の完掘状況（北から）



新潟県埋蔵文化財センター
マスコットキャラクター
「まいぶんちゃん」

新潟市 細池寺道上遺跡（第 3 次）現地説明会資料

日時：令和 8 年（2026 年）9 月 5 日（土）

場所：新潟市秋葉区飯柳 細池寺道上遺跡発掘調査現場

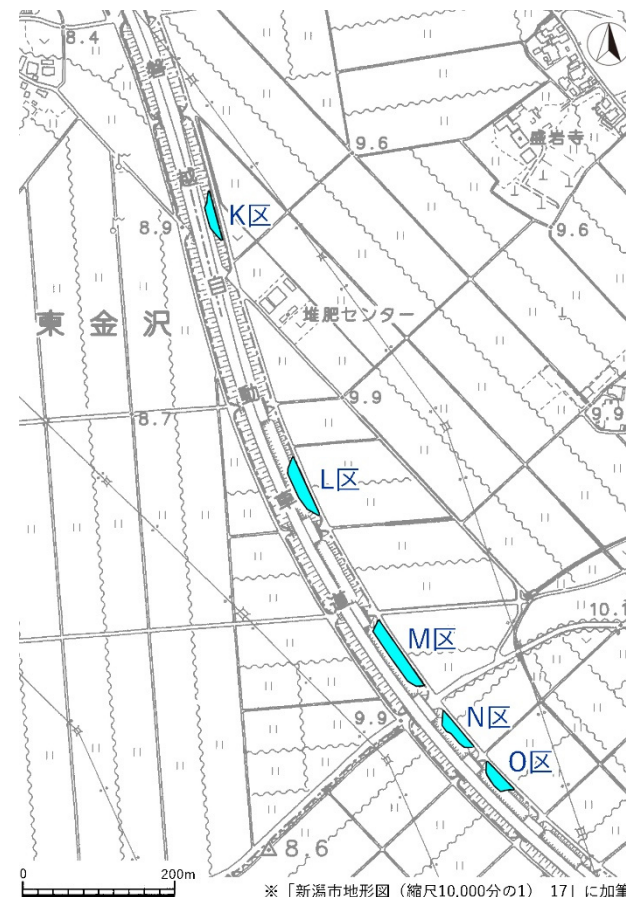
主催：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

細池寺道上遺跡の概要

遺跡は東を阿賀野川、西を能代川に囲まれた新潟平野の微高地上に立地し、標高は約 8 m です。磐越自動車道道路事業に伴い、東日本高速道路株式会社新潟支社新潟工事事務所から依頼を受けた当事業団が発掘調査を実施しています。調査は平成 3・4（1991・1992）年度に次ぎ、3 次調査となります。周辺では新潟市による 16 回の発掘調査が実施されています。

調査対象範囲は平成 3・4 年度調査区に沿って K～O 区に分かれ、面積は合計 3,039 m²です。現在、M 区で発掘調査を行っており、平安時代の土坑から土師器や須恵器などの遺物が出土しました。また、鎌倉～室町時代の溝が見つかり、平成 3～4 年度調査で検出された水田の可能性がある凹地遺構に伴うものと推定されます。溝からは珠洲焼甕^{すずやきかめ}が出土しました。

平成 3・4 年度調査では奈良～平安時代の掘立柱建物や鎌倉～室町時代の凹地遺構や溝が見つっています。今回の調査範囲でも同様の成果が得られていることから、水田などの生産域であったと考えられます。新潟市による周辺の調査では、奈良～室町時代の集落域^{しゅうらくいき}が確認されています。したがって、約 1.58 km²ある広い遺跡の範囲に各時代の集落域や生産域が点在していたものと推定されます。



■細池寺道上遺跡（第 3 次）の調査区（K～O 区）



■細池寺道上遺跡の遠景写真（北から） ※K 区から O 区までは約 1 km 離れています

M 区の調査概要

M 区は、全体の約 3/4 の調査を実施しています。これまでの調査で、遺構は奈良～平安時代の土坑^{どこう} 1 基、鎌倉～室町時代の凹地遺構^{くぼち いこう} 1 基、溝 16 条が見つっています（写真②、下図）。

【奈良～平安時代】 北端にある SK1205 は、長軸 2.8m、短軸 2.0m、深さ 11cm の楕円形の土坑です（写真③）。断面形は浅い皿状を呈し、埋土には炭が混じります。特に炭を多く含む遺構中央部のやや北寄りを中心に全体から平安時代の遺物が出土しています。出土遺物は大半が土師器^{はじき}で、ほかに黒色土器^{こくしよくどき}や須恵器^{すえき}の破片が少量、擦痕^{さつこん}のある軽石製石製品^{かるいしせい} 2 点が見つっています（写真①）。土師器は無台碗・長甕^{なががめ}・小甕^{こがめ}・鍋^{なべ}といった器種のバリエーションが認められます。SK1205 は出土状況から道具が捨てられた穴と推定されます。この SK1205 を含め、平成 3・4 年度の調査で見つかった掘立柱建物^{ほったてはしらたもの} SB715 や炉^ろの性格を持つ SK708 など奈良～平安時代の遺構（下図赤色）は、東西方向に流れる旧流路（下図右下）の南岸に沿って帯状に分布している可能性があります。

【鎌倉～室町時代】 南端にある SX1218 は、凹地遺構と考えられます。SD1217 より古く、時期の差を確認できます。平成 3・4 年度の調査では SX903（写真⑤、下図緑色）

など同様の遺構が複数見つっています。これらの大半は水田と考えられますが、畔^{あぜ}に囲まれた一般的な水田とは異なり、平らな地面を地下水面まで掘り下げてつくる「掘込田^{ほりこめだ}」である可能性が指摘されています。掘込田は、水田に不向きな微高地において生産力の向上を図るために工夫をこらして作られたものと考えられます。また、溝のうち SD1217 は幅約 3.5m、深さ約 0.5m で、南北方向へ 120m 以上直線的に延びており、幹線水路的な機能が想定されます（写真④）。遺構の重複関係からみて、鎌倉～室町時代の遺構群の中では比較的新しい時期の遺構と考えられます（下図青色）。出土遺物はわずかですが、SD1217 から取水する支線水路である SD1216 から珠洲焼甕^{しゅうしゅやきかめ}の破片（写真①）が出土しています。



■写真① M 区から出土した遺物



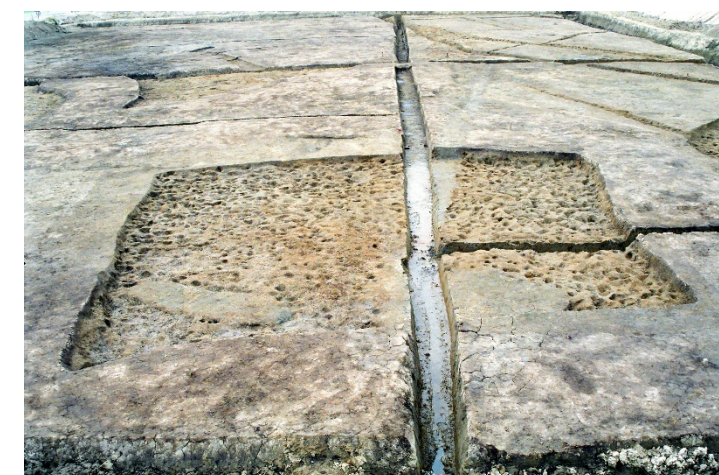
■写真② M 区北側の完掘状況（南から）



■写真③ SK1205 遺物出土状況（東から）



■写真④ SD1217 完掘状況（北から）



■写真⑤ 平成 4 年度調査 凹地遺構 SX903 完掘状況（南から）

